復興と平和願う調べ

スペイン出身の世界的チェリスト、パブロ・カザルスの弟子として知られるチェリスト平井丈一朗（たけいちろう）さんらのコンサート（IBC岩手放送主催）は15日、盛岡市の県民会館で開かれた。震災復興や世界平和への祈りが込められたメロディーが、聴衆約250人の心を打った。

息の合ったハーモニーを響かせるチェリスト平井丈一朗さんと次男のピアニスト元喜さん

チェリスト・平井丈一朗さん 盛岡で演奏会

コンサートは「『明日ありと…』愛弟子平井丈一朗が楽聖カザルスに捧げる演奏会」と題して開かれた。

平井さんの長男秀明さんの指揮で、盛岡二高音楽部の生徒が、平井さんの父康三郎さん作曲「ふるさとの」や、秀明さん作曲「砂の子守歌～被災地への祈りと子供たちの幸せな未来を願って」、盛岡市出身の歌人大西民子の短歌に平井さんが曲をつけた「きららかに」「明日ありと」などを、清らかな歌声で歌った。

平井さんは、カザルス直伝のバッハ「無伴奏チェロ組曲第1番」に続き、次男元喜さん（ピアノ）とのベートーベン「チェロソナタ第3番」、平井さん「祈りのアリア」、カザルス「鳥の歌」などを演奏。息の合ったハーモニーを響かせた。

被災者の痛み感じ演奏

インタビュー

カザルスに本当の音楽学ぶ

「楽譜は設計図のようなもの。演奏家は楽譜から作曲者の魂を読み取らなければならない」と語る平井丈一朗さん＝盛岡市内のホテル

震災復興チャリティーコンサートのために本県を訪れた平井丈一朗さんに、恩師パブロ・カザルスや音楽に込める思いなどを聞いた。

―コンサートの趣旨や本県との関係は。

「父（康三郎さん）、私、息子（秀明さん、元喜さん）と3代の音楽を入れた。『ふるさとの』は、父が石川啄木の歌に1935（昭和10）年、曲を付けた。前沢のコンサートに東京から招かれた父へ、出発する直前に主催者から『ふるさとの』に作曲してほしい、と依頼があった。夜行列車の車内で作曲し、翌日演奏した」

「私が一番最初に盛岡でリサイタルをしたのは50年近く前。また、盛岡市出身の歌人大西民子さんの短歌に私が作曲した。歌碑の除幕式では盛岡二高の生徒たちが私の指揮で歌った。岩手とのご縁は深い」

―恩師カザルスについて教えてほしい。

「カザルスは楽聖。世界中の人がお手本にするような方。その人間性が音楽に出る。音楽はテクニックがなければできないけれど、それだけではだめ。人間性を磨き、そこからにじみ出てくる音楽が本当の音楽」

―カザルスは音楽を通じて世界平和を願う運動を続けた。

「当時スペインが独裁政権で、先生も亡命した。長年フランスにいて後にプエルトリコへ行った。その際に難民をたくさん助けた。世界的に成功して相当な資産もあったが、全部つぎ込んでスペインの貧しい人たちのためのコンサートを企画したりもした。そういうことを実践した。平和とは、まずは自分に近い家族や友人、周りの人のことを大事にすること、と学んだ。歌碑の除幕式では盛だ」

―平和を祈る「鳥の歌」は特別な時にのみ演奏したという。

「国連で演奏した時の演説は有名で、今でも映像を見ることができる。私も、この曲を演奏する時は恩師カザルスの気持ちになり、世界平和を願って演奏する」

―東日本大震災後、被災地への思いを込めた「祈りのアリア」を作った。

「犠牲になられた方の鎮魂と、精神的なダメージを受けた心を和らげ平和が訪れるように、という祈りを込めた。この曲は犠牲になられた方、大変な被害を受けられた方たちの痛みを感じながら、全身全霊で演奏している」